



## 『古今和歌六帖』内閣文庫蔵和学講談所印本における書き入れ「六」をめぐって：第一帖を中心に

著者	福田 智子
雑誌名	文化情報学
巻	5
号	1
ページ	100-88
発行年	2010-06-30
権利	同志社大学文化情報学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013112">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013112</a>

## 『古今和歌六帖』 内閣文庫蔵和学講談所印本における

## 書き入れ「六」をめぐる——第一帖を中心に——

福田 智子

内閣文庫蔵和学講談所印本『古今和歌六帖』には、「六」と記す書き入れが存する。本稿では、第一帖について、禁裏本系統の桂宮本・永青文庫本、近世の流布本系統の黒川本・寛文九年版本の現存伝本四本の本文と比較検討した。書き入れ「六」は、和学講談所印本に複数次にわたって行われた校合のひとつであり、ある程度厳密な姿勢で施されたものと見られ、和学講談所印本特有の本文の乱れを正している箇所が多い。また、「六」書き入れには、比較対照した前掲二系統それぞれの、特徴的な本文に一致する箇所が散在していることが明らかになった。

## 一

『古今和歌六帖』（以下『六帖』と略す）は、『万葉集』『古今集』『後撰集』をはじめ、私家集や歌合などの歌や、現在では出典未詳とされる歌など、四千五百首あまりを収めた類題和歌集である。その『六帖』諸本の中に、内閣文庫蔵和学講談所印本（以下「和学」と略す）と称される一本がある。この写本には、「六」という書き入れが、第一帖に限ってみても、五十八箇所に見られる。

本稿では、この「六」書き入れが、『六帖』の現存諸本本文といかなる関係にあるのか、次の四本を対象に、第一帖について考察してみたい。

・ 宮内庁書陵部蔵桂宮本（以下「桂宮」と略す）  
 ・ 永青文庫蔵北岡文庫本（以下「永青」と略す）  
 ・ ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本（以下「黒川」と略す）  
 ・ 寛文九年版本（以下「寛九」と略す）  
 なお、『図書寮叢刊 古今和歌六帖 索引・校異篇』<sup>1)</sup>「古今和歌六帖」解題に拠ると、「桂宮」「永青」は、禁裏本Ⅰに分類される二本であり、また、「寛九」は近世の流布本、「黒川」も同じ系統の本文をもつとされる。

二一

まず、作者名に対する「六二」書き入れを見ていこう。用例は全部で八例、注の形式は、「六二……」が多く、「六二ハナシ」「六」がそれぞれ一例ある。

- (1) 六二           〔四例〕七・八・一六三・二二〇
- (2) 六二ナシ       〔二例〕一三三・二九三
- (3) 六二ハナシ   〔一例〕五一四
- (4) 六             〔一例〕六三一

このうち、五一四番の作者名には、「そイ」の異文注記に対して、「六二ハナシ」の書き入れがなされている。

そイ六二ハナシ  
すさのをのみこと〔和学、五一四〕

▽すさのをのみこと(傍書ナシ)〔桂宮・永青・黒川・寛九〕

この書き入れ「六」の指示は、「そイ」という傍書が「六」には存在しないということであるから、「六」本の本文には、「すさのをのみこと」と記されているのみということになる。これは、『六帖』の前掲四本の本文と一致する。「そイ」の異文注記は、「す」と「そ」の仮名字母の字形の類似に由来する可能性が高く、特異な本文である。<sup>(2)</sup>

また、二一〇番・六三一番の作者名においても、「六」は先の『六帖』四本と一致する。

六二  
つらゆき〔和学、二二〇〕

▽つらゆき〔桂宮・永青〕、貫之〔黒川・寛九〕

つらゆき   或本六〔和学、六三一〕

▽つらゆき或本〔桂宮〕、つらゆきある本〔永青〕、

貫之或本〔黒川・寛九〕

とくに後者は、作者名のみならず、「或本」という小字書き入れをも、「六」の本文として書き記している点に注意される。

このように見てくると、「和学」本文、あるいは「和学」の「イ」と記される異文注記に対し、「六」本は、「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」と同じ本文傾向が見取れそうだが、さらに考察していくと、状況はそれほど単純なものではなさそうである。

たとえば、八番の作者名に関して、書き入れ「六」は、「桂宮」「永青」とのみ本文の一致をみる。

六二丹  
壬生のた、みね〔和学、八〕

▽丹生のた、みね〔桂宮・永青〕、た、みね〔黒川・寛九〕

「壬」を「丹」と記すのは、きわめて特異な本文であることから、「六」本と「桂宮」「永青」との緊密な関係が浮かび上がる。<sup>(3)</sup> また、一六三番でも、「六」本の「或本」「ゆはら大きみ」は、「桂宮」「永青」とのみ共通する本文と言つてよいだろう。<sup>(4)</sup>

ゆけのわう

六二或本  
ゆはら  
大きみイ

「和学、一六三二」

▽ゆはらの大きみ 或本「桂宮・永青」、

(書入ナシ)「黒川」、(作者名・書き入れナシ)「寛九」

一方、「六」本が、「桂宮」「永青」ではなく、「黒川」「寛九」と一致する場合もある。

志貴王子

六二か、みノ王子トモ

「和学、七」

▽か、みの王女とも「桂宮・永青」、

一本志貴皇子か、みのみことと有「黒川」(頭注)、

か、みの王子とも「寛九」

七番では、書き入れ「六」は、「黒川」頭注の内容と「寛九」と一致し、「桂宮」「永青」の本文とは、「王子」「王女」の異同がある。また、一三三三番の場合も、同様の状況が見出せる。

いせ 六ニナシ「和学、一三三三」

▽いせ「桂宮・永青」、(ナシ)「黒川・寛九」

この場合、「桂宮」「永青」は、「和学」本文と一致し、作者名なしと記す「六」本は、「黒川」「寛九」と共通する。

さらに、残る二九三番では、先の一三三三番と同じ作者名「伊勢」に対

する書き入れだが、「六」本は、「桂宮」以外の「永青」「黒川」「寛九」と一致するのである。

伊勢 六ニナシ「和学、二九三三」

▽いせ「桂宮」、(ナシ)「永青・黒川・寛九」

以上の考察から、次のような点が看取されるであろう。まず、作者名に対する書き入れ「六」、全八例のうち、「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」のすべてと一致する例が三例ある。これは、「六」本の『六帖』諸本における本文の正統性がある程度裏付けるとともに、「和学」本文(五一四番の場合は「和学」の異文表記「イ」の特異性、さらには誤写や本文脱落の可能性を示唆するものである)。その上で、「六」本が「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」のいずれに近い本文をもつかという点を考える時、「桂宮」「永青」(八・一六三番の例)の場合と、「黒川」「寛九」の場合(一三三三番の例)が両様存するという、一筋縄ではいかない様相を呈しているのである。

### 三

次に、和歌本文における書き入れ「六」に視点を移してみよう。

(1) 六ニ (三十四例) (三十二首)

一五(イ)・一七・四九・六六(二例)・七九・八四・一〇二・一四二(イ)・一四八・一六〇(二例)・一六四・一七三・一九一・一九

二・二〇七・二〇八・二二三(イ)・二二九・二四一・二六五・二  
 七五・三一五・三三九・三四〇・三五二・三九一・四〇六・四三三  
 ・四三七・五二六・七二〇(イ)・七八一

(イ)

(2) 六ニナシ 「二例」 六五〇・一〇八

(3) 六 「七例」

三九七(イ)・四二二・五三三・五三六・五九九・六二二・六八四

(4) 六ニ(本文と傍書を記す) 「七例」(六首)

一一三(六二八)・一三七・二四七・二六二(二例)・三三二・六八

六(六二八)

該当箇所は全部で五十例、四十七首を数える。(1)と(3)は、「六」本の本文、あるいは本行に付された異文注記(「イ」と示される)を示すが、(4)では、「六」本の本文を、異文注記とともに記す。なお、記号(イ)は、「六二……イ」あるいは「六イニ」「六イ」というように記された、「六」本の異文を示すと思われる例である。

それでは、これらの和歌本文に施された書き入れ「六」が、前掲の「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」本文とどのような関係にあるのか。まず、基本的に考え得る、次の(一)と(四)の場合に該当する用例は、以下のとおりである。

(一)「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」と一致する例

〔二十三例〕

一七・四九\*・六六(二例のうち後の一例)・七九・八四・一〇二

・一四八・一六四・一七三・一九一・二〇七・二〇八・二二九・三  
 二九・三四〇・三九一・四〇六・四二二・四三三・四三七・五二三  
 ・五三六・六二二

(二)「桂宮」「永青」と一致する例 「七例」

一五\*・一一三\*・一四二\*・一九二・二四一・三三二\*・七八一\*

(三)「黒川」「寛九」と一致する例 「四例」

六六(二例のうち前の一例)・三二五・三九七\*・六五〇

(四)「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」のいずれとも一致しない例 「二例」

二六五・二七五

右によって、全五十例中、三十六例が整理される。なお、「六」本の本文と異文注記が、ともに該本本文のそれにすべて一致すると見なされる場合には、歌番号の後に「\*」を付した。

以下、これら(一)と(四)の分類に即して、具体例を採り上げながら考察する。なお、残り十四例(一〇八・一六〇(二例)・二一三・二三七・二四七・二六二(二例)・三五二・五九九・五二六・六八四・六八六・七二〇)についても、考察を進めるにあたり、適宜抜粋して論じていく。

#### 四

書き入れ「六」の全五十例中、「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」と一致する例は、二十三例にのぼる。

その中には、次の一四八番歌のように、「六」書き入れが、「和学」本

文の文法的な不整合を正す本文を示すものがある。

みつね

年ことにあふとはすれと七夕の

六二

ぬる夜のかすそすくなかりけり「和学、一四八」

▽ける「桂宮・永青・黒川・寛九」

係助詞「ぞ」の結びとして、「和学」本文の終止形「けり」に対し、書き入れ「六」は、連体形「ける」という本文を示す。<sup>(6)</sup>また、三三九番歌では、「和学」の第二句冒頭「闇」に対して、書き入れ「六」は、本文「見」を提示する。

みつね

ひるなれや六二見闇そまとひぬる月影を

けふとやいはむ今宵とやいはん「和学、三三九」

▽（第二句）見そまとひぬる「桂宮・黒川」、

みそまとひぬる「永青・寛九」

これは、初句「ひるなれや」の句末の「や」を、第二句頭の文字として再度読んでしまったために、「和学」では、「闇（やみ）」という本文が生じてしまったものと推察される。

このように、「和学」の本文の乱れた箇所は、諸本共通する本文を、「六」書き入れとして記す箇所は、少なくない。

つらゆき

六な 又家集な  
のへふるを人ももなしとてわか宿に

家集ある

みねのしら雲をりて入らん「和学、五三六」

▽（初句）のへなるを「桂宮・永青」、

野へなるを「寛九」、野辺なるを「黒川」

右の五三六番歌でも、「和学」の初句「のへふるを」は、他の四本に比して、特異な本文である。ちなみにこの場合、「和学」の校合に用いた本文は、「六」の他に「家集」もあつた。言うまでもなく、貫之の私家集との校合であろう。<sup>(7)</sup>

また、六二二番歌では、「和学」のように結句を「立わたる」とする本文は、他の四本には見られない。

うつくしき妹を思ふと霞たつ

六戀

春日も暮に立わたるかな「和学、六二二」

▽戀「桂宮・寛九」、こひ「黒川・永青」

第三句「霞たつ」とあることから考えれば、結句を「立わたる」とするのは、やはり目移りなどからくる誤写かと想定される。書き入れ「六」の本文「戀」は、他の四本に共通する本文である。

このように、「六」本による、「和学」本文の不審点の修正と見なされる箇所が、書き入れ「六」の全用例のうち、半数近くを占めるといふことは、言い換えれば、「和学」本文の乱れの証左ともなるであろう。

なお、「六」本の本行の本文ではなく、異文注記のほうに、「桂宮」「永

青「黒川」「寛九」本文と一致すると思しき例がある。

ほと、きす後の五月もありとてや

なかくう月を過し果つる「和学、二三七」  
六二くイ

▽（第四句）なかくう月を「桂宮・永青」、

なかくうつきを「黒川・寛九」

二三七番歌では、第四句「なかくう月を」の三文字目「て」には、「くイ」という「六二」書き入れがある。これは、先の四本すべてと一致する本文である。なお、この「くイ」という異文注記の右に、さらに「て」と書き添えてあるということは、「六」本の本文は、「和学」同様に「て」であったと考えることも可能であろう。ちなみに、当該歌は、『亭子院歌合』の歌であり、十巻本には載らないが、二十巻本に、「時鳥のちのさ月もありとてやながくうづきをすぐしてはてつる」という本文で<sup>(8)</sup>取められており、「く」本文をとる。とすれば、この場合、「和学」本文の修正は、「六」本の異文注記でなされたことになる。

## 五

次に、書き入れ「六」が「桂宮」「永青」と一致する例を見てみよう。一九二番歌は、「黒川」「寛九」では、二句目以降、直前の一九二番歌に目移りしており、本文比較の対象にならない。残る「桂宮」「永青」と、

書き入れ「六」とは、共通する本文をもっている。

ぬれきぬと人はいはすな菊の花

よはひのふとも我そほちつる「和学、一九二」  
六二そ  
▽とそ「桂宮・永青」

また、次の七八一番歌では、第三句「ひるはたえ」に対して、書き入れ「六」は、三文字目以降を「きえて」と異文注記する。

みかきもり  
君かもる衛士の燃火のひるはたえ  
きえて六イ

よるはもえつ、物をこそおもへ「和学、七八一」

▽（第三句）ひるはたえ「桂宮」、ひるはたへ「永青」  
きえてイ  
ひるはもえ「黒川」、ひるはたえ「寛九」  
きイ

すると、「和学」本文「たえ」に異文「きえて」を注記する書き入れ「六」と同等の内容をもつ本文は、「桂宮」「永青」であろう。<sup>(9)</sup>ちなみに、「黒川」「永青」は、本文・異文ともに、助詞「て」を記さない。なお、初句「君かもる」には、「みかきもり」という右傍書があるが、「桂宮」「永青」は本文・傍書ともに「和学」のかたちであり（傍書には「イ」と記す）、一方、「黒川」「寛九」は傍書「みかきもり」を本文とし、書き入れはない。さらに、三三二番では、第二句「たなひけるとも」の五文字目「る」が、「六」本では「り」であるという。この点では、比較対象とする四本ともに、「六」本と同じ「り」本文を有するが、「六」本の異文注記「る」をもつのは、「桂宮」「永青」のみである。

あま雲のたなひける六二りともみえぬ夜ハかな

ゆく月かけそのとかなりけるヒビ「和学、三三二」

▽（第二句）たなひけりともるイ「桂宮・永青」、

たな引りとも「黒川」、たなひけりとも「寛九」

前節で触れた二三七番歌もそうであったように、書き入れ「六」は、「六」本の本文のみならず、そこに記された異文注記までもそのまま書き記すという、比較的厳密な校合態度が窺える。このことは、次の一一三番歌にも看取される。

つらゆき

みそきする川つるイ六二ハつるの瀬するイみれはから衣（以下欠）「和学、一一三」

▽（初句）みそきするすイ「桂宮・永青」、みそきする「黒川・寛九」

第二節で、作者名に対する書き入れに言及した際に採り上げた五一四番歌の場合と同じく、この歌でも、まず「イ」という異文注記があり、同じ箇所を重ねて、書き入れ「六」が記される。すなわち、初句「みそきする」の四・五文字目の異文「つる」を受けて、この本文と異文とが入れ替わった、本文「つる」、異文「する」という「六」書き入れがなされるのである。この書き入れ「六」は、「桂宮」「永青」と、本文・異文ともに合致する。ちなみに、「黒川」「寛九」本文は、「和学」本文と、書き入れ「六」および「桂宮」「永青」の異文と同じである。

このように、「和学」では、「イ」という異文注記の後、書き入れ「六」がなされたとすれば、次の四九番歌についても、以下のような考察が成り立つであろう。

くにすらイこの若六二なつまんとしめし野の（下句欠）「和学、四九」

▽（初句）くにすらカイこの「桂宮」、くにすらカこの「永青」、

くにすらカこの「黒川」、くにすらカこの「寛九」

初句「くにすこの」の四文字目の異文注記「ら」を受け、書き入れ「六」は、五文字目「の」に対し「か」という本文を示す。これは、「桂宮」「永青」が、「和学」と同じく「くにすこの」という本文をもち、これに対して「ら」という異文注記を有するのと、ほぼ同じ内容を示すと見て、まず大過ないのではなからうか。なお、当該歌においては、「黒川」は「和学」の異文注記に、「寛九」は「和学」本文に、それぞれ合致する。以上、「和学」の書き入れ「六」本が、「桂宮」「永青」に一致する例を考察してきたが、次の歌は、これまでの例とはいささか状況が異なる。

霜月

さかしらに夏は人まねさ六イニ、の葉の

さやく霜夜をわれひとりぬる「和学、二二三」

▽（第三句）さ、の葉に「桂宮」、さ、のはに「永青」、

さ、のはの「黒川・寛九」



すなわち、第三句「さ、の葉の」の五文字目「の」に対する書き入れ「六」は、異文として、「に」を示すのである。確かに、当該箇所を「に」とするのは、「桂宮」「永青」であるが、そうすると、「六」本の異文と、「桂宮」「永青」が一致することになる。一方、「の」本文をとる「黒川」「寛九」を見てみても、傍書はない。ここにも、「和学」書き入れ「六」本の複雑な本文の性格が窺える。

## 六

では、前節の考察とは逆に、書き入れ「六」が「黒川」「寛九」と一致する例を見よう。次の三二五番歌の結句の「そら」という語が、書き入れ「六」では「底」とある。この「そら」と「底」との本文の対立は、果たして、「桂宮」「永青」と「黒川」「寛九」との間に看取されるのである。

### 冬の月

冬の池の上は氷にとちたるを

いかてか月のそら六二底に入らむ 「和学、三二五」

▽空「桂宮」、そら「永青」、底「黒川」、そこ「寛九」

したがって、当該箇所においては、「六」本は「黒川」「寛九」と合致する。

同じことは、六五〇番歌にも言えるであろう。

烁六二ナシきりの絶六二ナシすもあらなんあし曳の

山のにしきをむらなから見ん 「和学、六五〇」

▽(第二句) た、すもあらなん 「桂宮」、

た、すもあらなむ 「永青」

絶すあらなん 「黒川・寛九」

この歌では、第二句「絶すもあらなん」の助詞「も」が、「六」本にはないという。これも、「黒川」「寛九」とまったく一致する本文である。

散花のもと六二二にきてしそ暮はつる

はるのおしさもまさるへらなり 「和学、六六」

▽きてしそ「桂宮・永青」、きてこそ「黒川・寛九」

へらなれ「桂宮・永青・黒川・寛九」

右の六六番歌では、「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」が、ともに結句を已然形「へらなれ」をとることから、それに呼応して、第二句は係助詞「こそ」をとるべきであろう。つまり、本来は、「こそ……べらなれ」の型であったと推察されるのである。この点、「和学」本文は、「しぞ……べらなり」という文法的不整合をもつ。第二句の当該箇所は、「し」と「こ」という、仮名字母の形が似通った、たった一文字の相違に過ぎないが、それでも「和学」が、「桂宮」「永青」の乱れた本文を踏襲したかたちになっている点には、留意されよう。そして、それを指摘した書き入れ「六」は、「黒川」「寛九」と一致する。

また、三九七番は、結句「しるへなりける」の四文字目「な」について、

「六」本の異文には「か」とあるという。比較対象の四本を見てみると、いずれも本文は、「和学」本文と同様「しるへなりける」だが、「六」本と同じ異文を有するのは、「黒川」「寛九」のみである。

夏なから汀の風の涼しきは

浪にとひてそしるへなりけるか六イ「和学、三九七」

▽（結句）しるへなりける「桂宮・永青」、  
しるへなりけるかイ「黒川・寛九」

このように、「六」本が、当該箇所の異文表記に至るまで、「黒川」「寛九」と本文の一致を見る例が存する一方で、六八六番では、次のような現象も見られる。

夜を寒き朝戸をあけて出見れは  
六二ハミ本  
ミイ

庭もはたらに雪はふりつ、「和学、六八六」

▽（初句）よをさむみイき「桂宮・永青」、よを寒み「黒川・寛九」

すなわち、初句「夜を寒き」の「き」は、「六」本では「み」であり、この点に関する限り、「六」本は、「黒川」「寛九」と本文が一致する。だが、「六」には異文注記「き」があるのに対し、「黒川」「寛九」はない。ちなみに、当該箇所には、書き入れ「六」以前に付されたと思われる「イ」という異文注記があるが、これは、「桂宮」「永青」と本文・異文がすべて合致し、「六」本と本文と異文が逆である。前節の終わりに採り上げた二二三番歌からもわかることであるが、「六」本には、「黒川」

「寛九」の本文を「桂宮」「永青」で校合したとき痕跡が残る部分も有しているようである。<sup>(10)</sup>

## 七

最後に、書き入れ「六」が、「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」のいずれの本文にも一致しない例を挙げておこう。該当するのは、以下の二例である。

たわすれていをそねにけるあかねさす

ひるはさはかり思六二ハミ本ひしものを「和学、二六五」

▽（結句）思六二ハミ本ひし物を「桂宮・黒川」、おもひしものを「永青」、  
思ひしものを「寛九」

二六五番歌は、『六帖』のいわゆる出典未詳歌である。結句「思ひしものを」は、四本すべて同一であり、安定した本文である。すると、「六」本の「思ひしもの」という本文は、きわめて特異であるといえよう。そもそも当該歌は、「てる日」題の四首目にあたるが、直前二首の結句末尾は、「和学」を除く「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」において、順に「なりけり」「なるらん」とある。「和学」のみ、当該歌の直前に位置する二六四番歌の結句末尾が、「なるらん」ではなく「成けり」になっているのである。この本文は、さらにその直前の、二六三番歌結句末尾と一致する。あるいは、この二六四番歌の結句末尾は、二六三番歌からの目移りによる本文であるかもしれない。そして、二六四番歌結句末尾の

異同を、誤って二六五番歌に書き入れてしまったという可能性も考えうるであろうか。

また、次の二七五番歌では、結句「はやくはれなん」の四文字目「は」が、諸本間で不安定な本文になっている。そこに、「つ」という書き入れ「六」が存する。

つらゆき

なかむれはくるしき物を山の端に

入日はやさしはやくはれなん<sup>六二つ</sup>「和学、二七五」

▽(結句)はやくもれなん「桂宮・永青」、  
はやく暮なん「黒川・寛九」

書き入れ「六」が示す「はやくつれなん」という句では意が通じないが、仮に「つ」を、字形の酷似した「ゝ」(踊り字)の誤写と見れば、「黒川」「寛九」の本文と一致することになる。ちなみに、この歌は『貫之集』六八一番(陽明文庫本)では、「ながむればわびしきものを山のはに入日とくさしはやくもれなん」となっている。「桂宮」「永青」の「はやくもれなん」は、三文字目と四文字目が逆になったかたちである。

最後に、「六」本の異文注記が、特異本文をもつ場合を挙げておく。

雪を、きて梅の花こひそ足引の

山かたかけて<sup>つきイ</sup>家るせる君「和学、七二〇」  
ワナイ

▽かけて「桂宮」、かけて<sup>つきイ</sup>「永青」、かけて「黒川・寛九」

七二〇番歌は、『万葉集』巻第十、一八四二(一八四六)番の歌である。第三句「山かたかけて」には、おそらく書き入れ「六」に先立って、「つきイ」という異文注記がなされていたであろう。これまで見てきたように、「六」本の校合は、本文の右に傍書されるのが常であるが、この歌の場合、当該箇所には別の異文が記される。そこで、「六」の書き入れを、本文の左に書き入れたのであろう。その「六」の異文注記によれば、「山かたわけて」という句が浮かび上がるが、『六帖』諸本はおろか、出典の『万葉集』諸本にも、そのような本文の存在は確認できない。<sup>(11)</sup> そもそも『万葉集』では、当該箇所を「山片就而」(西本願寺本)と記すのであるから、その点では、「やまかたつきて」という「和学」「イ」の異文注記が、妥当な読みということになる。だが、『万葉集』歌が元来の漢字表記から離れ、仮名書きで流布する平安期<sup>(12)</sup>においてはむしろ、これ以外の読みが生じた原因とその伝来過程をこそ、究明すべきであらう。

八

以上、「和学」第一帖における書き入れ「六」本文の性格について、「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」の四本と比較対照しながら考察してきた。

「和学」には、「六」の書き入れがなされる前に、「イ」と示す異文注記がすでにあつたようである。さらに、「六」の後には、「家集」と明記する校合の跡も存する。

書き入れに「六」と記したのは、まず、既存の異文注記「イ」と区別

するためであったのだろう。『六帖』の書き入れに「六」とあるのは、一見、奇異な印象をもつ向きもある。だが、『六帖』が類題和歌集であることを思えば、校合対象となる歌集は、『六帖』諸本の枠内にとどまらず、勅撰集や私家集など、他の歌集に及ぶことになる。「六」と明記する書き入れは、おそらく、「家集」と記される私家集との校合の跡とも区別できるよう、考慮されたものであろう。実際、それを手がかりに、複数次に及ぶ「和学」本文の校合の痕跡が、くつきりと浮かび上がってくるのである。これはあたかも、たとえば山本明清『古今和歌六帖標注』が、『六帖』本文の異同を、校合した歌集名とともに示す態度と、通底するものがあるのではないだろうか。

では、書き入れ「六」が、第一帖において、「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」のいずれの本文に近いか、あるいは、「桂宮」「永青」の禁裏本と、「黒川」「寛九」の近世の流布本との、どちらのグループにより近いかを判断しようとする、これがなかなか困難である。

そもそも、「和学」本文自体、明らかな誤写を含んだ、あまり整った本文ではないという面をもつ。「六」書き入れのほぼ半数の本文が、「桂宮」「永青」「黒川」「寛九」と共通するということは、それを端的に示している。『和学』校合の動機は、まず、それらの本文の乱れを直すために、不審な箇所を、別の『六帖』の本で確認しようとしたのではなかったか。

「六」書き入れは、禁裏本の流れを汲む「桂宮」「永青」の本文と比較すると、必ずしも整った本文であるとは言えない部分が共通していることがある。そういった特異な本文を、「六」本も有していたと見られる。その一方で、近世の流布本である「黒川」「寛九」が、「桂宮」「永青」

と対立する本文を有する場合に、「六」本が、「黒川」「寛九」本文と一致することもあり、そこに加えて、「黒川」「寛九」にはない、「桂宮」「永青」本文に一致する傍書をもつ箇所も存する。つまり、「六」書き入れには、近世の流布本の本文に禁裏本を校合するという側面も見出されるのである。さらに、現時点では『六帖』諸本に存在が認められない本文が、「六」書き入れに少数ながら見出される。この用例はおそらく、今後、「六」書き入れの素性をさらに詳しく考察していく上で、重要な鍵になってくると思われる。翻って考えてみると、書き入れ「六」がすべて、特定の一本に由来するものであるかどうか、実は不明であると言わざるを得ない。とすれば、複数の本による度重なる校合を経ているという想定も視野に入れて、用例を吟味する必要がある。

書き入れ「六」は、ある程度厳密な姿勢で校合されていると推察される。「和学」と「六」本の本行と傍書が逆になっている場合も、当該箇所本文を、本行と傍書をそのままのかたちで書き入れている箇所は、それを端的に示している。その書き入れ「六」の、かくのごとき複雑な様相を呈する本文状況が、以上のように明らかになったわけだが、「和学」全体の書き入れ「六」の分布を概観すると、帖ごとに用例の偏りがあるように見受けられる。第二帖以降の考察については、すべて別稿に譲りたい。

## 註

- 1 宮内庁書陵部編、養徳社、昭和四十四三月。
- 2 「和学」異文注記が示す「そさのを」の本文は、『新編国歌大観』を

検すると、「そさのをのみそもじぐさりする人はいづもぢよりや過ぎてきつらん」(月詣集・巻第九雑下・八二一・賀茂成助・住吉の国基がはじめてあはんとてまかできて、かどにたちてかくと申しいれたりければ、いひ出だして侍りける)、「そさのをのみことの折に あしびきの やまとこと葉は あらかねの つちにも更に おこりつつみそもじあまり ひとつもじに よみならはして 呉竹の 世世にもたえぬ 物なれば……」(久安百首・六〇〇)、「そさのをも君がみことのためとてやや雲のしるしおもひたちけん」(千五百番歌合・雑一・二七九一・内大臣)、その他、『色葉和難集』『和歌無底抄』『蔵玉集』にも見える。

3 書き入れ「六」が示す「にふのた、みね」という本文は、たとえば、『古今集』諸本において、私稿本(一一・一五七・一六三・一八三・一九四・二六三・三〇六・三二七・四二五・四六二番)や雅俗山庄本(四二五・六二五・八三五・九一七・一〇〇三番)などに見える。前田本(二八三・二五八・三二七・四二五番)では、二五八番以外の三首について、「にふのた、みね」の「に」の横に「ミ」の朱傍書があり、また、後鳥羽院本(四七八・五六六・六二五・八三五・九一七・一〇〇三番)でも、四七八・九一七・一〇〇三番について、「にふのた、みね」の「に」に「み本」の傍書が見える(久曾神昇氏『古今和歌集成立論』資料編上・中・下・研究編全四巻、昭和三十五年三・九・十二月、三十六年十月刊、風間書房)。

4 ただしこの場合、書き入れ「六」にある「イ」の文字は、「桂宮」「永青」にない。

5 「六二」としか記されない。

6 類例に、結句の連体形「ける」に対して終止形「けり」を示した七九番歌がある。

7 正保版本歌仙家集『貫之集』二二〇番の本文は、「野へなるを人もなしとて我宿にみねの白雲おりやあるらん」となっており、「和学」の「家集」書き入れの本文と合致する。ただし、結句の三文字目の助詞は「や」であり、その点は「和学」とは異なる。

8 『新編国歌大観』所収『亭子院歌合』解説、八番。

9 「永青」は、「たえ」を「たへ」と表記するが、このような仮名遣いの相違は、本稿ではとくに採り上げない。

10 他にも、二四七番がある。

11 『校本萬葉集』による。

12 この点については、後藤利雄氏「仮名万葉と見た赤人集及び柿本集一部―私家集の成立に関する考察―」(『國語と國文学』第二十七卷第二号、一九五〇年二月)、竹下豊氏「古今和歌六帖の人麿歌について」(『國語國文』第四十二卷第十号、一九七三年十月)、渋谷虎雄氏「万葉集原歌不明の歌について―歌経標式から古今六帖まで」(『上代文学』第三十九号、一九七七年十一月)、清水婦久子氏「歌字書における「萩」―平安時代の『万葉集』享受」(『青須我波良』第四十九号、一九九五年七月)を参照されたい。なお、拙稿「『古今和歌六帖』の万葉歌再考」(『香椎潟』第五十三号、二〇〇七年十二月)においても少しく言及している。

## 附記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「文字列データ解析システムの構築と平安中期歌語生成に関する研究」（課題番号19500217、平成十九～二十一年度）における研究の一部である。